

## 月の運行がもたらす自然現象を「祭る」「見る」 -古代の砂嘴と砂州-

2023年1月21日(土) 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室 坂江渉

### はじめに

▼月の運行がもたらす自然現象のうち、潮の干満にしたがい見え隠れする砂州と砂嘴の祭りと、それを「見る」ことを通したタマフリ(=魂振り)の感染呪術について考える。前者に関しては祭儀神話論の立場で、記紀の「国生み」神話に眼を向ける。後者は〔土橋 90〕を参照する。

▼砂嘴・砂州形成のための3条件〔加藤 23〕

- ①砂礫の供給源、②砂礫を運搬・堆積させる潮流、河川、③堆積場の存在
- 形成された砂嘴・砂州が見え隠れする現象は、基本的に月の運行にもとづく

### 一、砂嘴と砂州の祭祀・呪術の痕跡

(1) 岡山県笠岡諸島の大飛島遺跡〔笠岡市教委 2010〕

▼巨石群の隙間から、奈良~平安期の須恵器、奈良三彩の小壺、ガラス・玉類、大量の皇朝十二銭などが出土→「国家的」な祭祀遺構という評価〔亀井 80〕

▼眼前の浜辺には、大潮の干潮時、向かいの小飛島に伸びる砂嘴が出現(約 30m)。

・大飛島遺跡は砂嘴と一体化した祭祀遺構〔坂江 03〕。

・潮位の変化にともない、時には姿を消し現し、また日によって姿を変える場合がある砂嘴を、神が宿る場所、ないしは神が去来する場所として神聖視した可能性。

□飛島の夏祭り(7月の第2土曜日)

小飛島の巨大磐座の前の「嶋神社」の祭祀

村人が神輿を担いで練り歩き、大飛島への「お渡り」神事

今は神輿船の砂嘴への上陸はないが、この祭りはかつて7月最初の大潮の日に実施。

(2) 丹後の天橋立とイザナギの「ハシ立て」神話

▼天橋立のつけ根に延喜名神大社の「籠神社」が鎮座。背後の山上には成相寺(西国札所)。

□古代の籠神社の祝は、「海部氏系図」を作成した海部直氏(彦火明命を始祖)

祭神は淡路の海人が奉じるイザナギの命

▼『丹後国風土記』逸文(釈日本紀、5)

□「有<sub>レ</sub>速石里<sub>ニ</sub>。此里之海、有<sub>レ</sub>長大<sub>ナ</sub>前<sub>ニ</sub>。(長<sub>ニ</sub>…、広<sub>ニ</sub>…)。先名<sub>ハ</sub>天<sub>ノ</sub>橋<sub>ノ</sub>立<sub>ニ</sub>、後名<sub>ハ</sub>久<sub>ノ</sub>志<sub>ノ</sub>浜<sub>ニ</sub>。然云者、国生大神、伊射奈芸命、天為<sub>レ</sub>通行<sub>ニ</sub>、而<sub>レ</sub>橋作立。故云<sub>レ</sub>天<sub>ノ</sub>橋<sub>ノ</sub>立<sub>ニ</sub>。神御寢坐間、仆伏。仍恠<sub>レ</sub>久<sub>ノ</sub>志<sub>ノ</sub>備<sub>ノ</sub>坐<sub>ニ</sub>。故云<sub>レ</sub>久<sub>ノ</sub>志<sub>ノ</sub>備<sub>ノ</sub>浜<sub>ニ</sub>。此、中間云<sub>レ</sub>久<sub>ノ</sub>志<sub>ノ</sub>」

□2つの地名とその景観の成り立ちを、イザナギによる「ハシ(=梯)立て」の話によって説明。

現在の天橋立の砂嘴は、古代には「久志浜」(=串浜)と呼ばれ、峻険な岩山の成合寺の方が本来の「橋立」の地〔柳田 36〕。

▼大飛島と異なり見え隠れする砂嘴ではないが、海に向かって伸びる「長大な前」は、神秘的景観として畏敬視され、おそらく海部氏が司る「ハシ立て」の祭儀も催された。

(3) 八十島祭 -難波潟の砂洲状の島々-

▼上町台地の高みで、宮中女官たちが難波潟の「大八島国」の国魂を大王(天皇)の衣に付着させて身体に取り入れ、その国土支配権を裏付けようとする王位就任儀礼。「国生み」神話の後半がその縁起譚という見方〔岡田 58〕。

▼ただし八十島祭の原型は、難波潟の干潮時に多数現れる砂州状の島々(=生島・足島)の情景を見て、その生命力・霊力を得ようとする「タマフリ」の呪術に求められるのではないかと。

#### (4) 式内社

▼安房国安房郡の「后神あめのひりとめ天比理刀咩神社。(元名洲神)」

▼河内国讃良郡の「須波麻神社(鍬・鞆)」

(※)宝亀 11 年『西大寺資材流記帳』…「河内国更占郡渚浜庄地」



▼古代の砂嘴や砂州は、各地の海人や王権の船によって祭られたり、その生命力や活力を獲得しようとする感染呪術(タマフリ)の対象になる場合があった。

## 二、淡路の海人と記紀の「国生み」神話

### (1) 淡路の海人とイザナギの「崇り神」伝承



▼ 8 世紀の出土木簡

- 津名郡安乎郷と育波郷に海部と海氏。
- 三原郡阿万郷に海部氏が居住。

▼日本書紀の海人伝承

- 応神天皇妃を吉備に送り届けたという「淡路の御原の海人八十人」の伝承(応神 22 年 3 月条)
- 「淡路の海人八十人」が水主として朝鮮半島へ派遣された話(仁徳即位前紀)
- 住吉仲皇子の謀反に加担としたという「淡路の野島の海人」の説話(履中即位前紀)。

▼イザナギの「崇り神」伝承

- 淡路で遊獵する履中一行に、伊奘諾神が「河内飼部」の鯨の血の気に堪えずと託宣(履中 5 年 9 月壬寅条)。
- 淡路遊獵時の允恭一行に対し、「島の神」が崇りをなし、赤石海底の真珠を採り神前に祭れと要求(允恭 14 年 9 月甲子条=阿波国白水郎オサチの墳墓伝承)。

## (2) イザナギ・イザナミ信仰の広がり

①	大和国添下郡	伊射奈岐神社	大、月次、新嘗。
②	葛下郡	伊射奈岐神社	
③	城上郡	伊射奈岐神社	
④	摂津国島下郡	伊射奈岐神社二座	並大、月次、新嘗。
⑤	伊勢国度会郡	伊射奈岐宮二座	伊射奈弥命一座。並大、月次、新嘗。
⑥	若狭国大飯郡	伊射奈岐神社	
⑦	<b>淡路国津名郡</b>	<b>淡路伊佐奈伎神社</b>	<b>名神、大。</b>
⑧	阿波国美馬郡	伊射奈美神社	
⑨	〃	天橋立神社	近くに峻険な岩山の寺、箸蔵寺がある。
⑩	和泉国和泉郡	淡路神社	
⑪	播磨国揖保郡	阿波遅神社	
⑫	丹後国与謝郡	天橋立、久志浜	イザナギのハシ立て伝承（風土記逸文・籠神社）
⑬	播磨国揖保郡	宇頭川の川底	天日槍は剣を攪拌し海中に宿ったという（風土記）
⑭	出雲と伯耆堺	比婆之山	神避れる伊耶那美神の葬送地と伝える（古事記）
⑮	出雲国意宇郡	出雲神戸	熊野加武呂命はイザナギの真子と伝える（風土記）
⑯	島根郡	千酌駅家	イザナギの御子、都久豆美命がいると伝える（〃）
⑰	神門郡	古志郷	イザナギの時、池を築造したという（〃）
⑱	紀伊国熊野	有馬村	神退去れる伊弉冉尊の葬送地（書紀、5-5一書）

### ▲イザナギ・イザナミ信仰に関わる式内社と伝承地一覧

（※『延喜式』巻8、祝詞29 出雲国造神賀詞条にも、熊野大神はイザナギの「日真名子」とみえる）

## (3) 「国生み」神話研究の成果〔岡田58〕（※）〔前川68〕〔武田87〕

### ▼イザナギ・イザナミの神

□宮中の信仰体系と無縁の存在。

□淡路の海人のローカルな守護神として、かつ土地の創造神として崇敬。

### ▼「国生み」神話の素材

□淡路の海人の民間祭祀の時、諸神事の縁起譚として口頭で語られていたものが原資料。

↓(ただし)

□口承資料はそのまま記紀に筆録されず。とくに後半のミトノマグアイによる「国生み」と「神生み」の物語は、王権の領土支配の正統化をめざす天皇制神話に改変された（「大八島国」の誕生譚は八十島祭の起源説話として機能）。

### ▼記紀の「国生み」神話の二側面

①民間伝承性…矛の海水攪拌による「島造り」+オノコロ島での柱立て+その下で男女和合の話。

②天皇制神話…二神の和合にもとづく「大八島国」の誕生と、三貴神を含む「神生み」の物語。

↓(とすれば)

▼①にみえるオノコロ島とは何で、一連の話から、どんな淡路の海人の祭りを引き出せるのか。

## 三、淡路の海人の祭祀習俗

### (1) オノコロ島について

▼これまで絵島・沼島・友ヶ島など、固有の島嶼だと考えられてきた。しかし淡路島沿岸に、比較的多く確認できる砂嘴や砂州状の島々をさすのではないか。

①三原川河口部の慶野松原付近

3つの砂堆列からなるラグーン状の地形〔高橋82〕。

近くには式内社の湊口神社。淡路国衙の「外港」。弥生時代の松帆銅鐸の埋納地

## ②南あわじ市阿万吹上浜付近

3つの砂堆列の存在

三原郡阿万郷の比定地。「御原の海人」(応神紀 22 年条)の有力根拠地の一つ。

## ③『万葉集』に出てくる「野島の崎」(現在の淡路市富島付近)

ただしこの砂嘴は、887 年の仁和の南海地震の大津波で消失したという指摘〔加藤 23〕

## ④洲本市由良の成ヶ島の砂嘴

淡路の「天橋立」と呼ばれる景勝地

## ⑤南あわじ市福良湾内外の砂嘴

大園島(=見せかけの砂嘴の可能性)、洲崎、ジャノヒレ

## (2) 想定される海人の祭りの内容

### ①干潟ないしは砂嘴の浜辺における、武具(矛)を用いた海水攪拌の神事

▼淡路の海人は、大潮の日の満潮時、小舟などで干潟や沖合に繰り出す

船上から武具(矛)を海に入れ、海水を攪拌する所作

その後、干潮時の砂州・砂嘴の出現を待つ

□この神事的前提には、一つに、出現した砂嘴や砂州状の島々は、その後、徐々に陸地化がすすみ、やがては自分たちの故郷の土地(島)の創造につながるという見方。もう一つは、「鳴門の渦潮」の存在の大きさ。

□オノコロ島が成る話…こうした神事の起源を語ろうとするもの。

### ②出現したオノコロ島での「ハシ立て」の儀礼

▼記紀の「島造り」神話によると、イザナギとイザナミは矛のほか、橋(梯)や柱などの「ハシ」を垂直方向に降ろしたり、島の上に立てたという。

『丹後国風土記』逸文にもイザナギによる「ハシ立て」神話がみられた。

阿波国美馬郡には、「伊射奈美神社」とともに「天椅立神社」という式内社が鎮座。

▼「ハシ立て」儀礼の意義

(A)祭神を憑依させる「依り代」としての役割

(B)『風土記』の国占め神話の「杖立て」と同じく、祭りを司る海人の族長層の土地領有の標識

□族長はハシのもとで、来臨した神に航海安全や豊漁の祈る。それとともに、神への感謝の意を捧げる「供饌」など厳粛な神事を執行

□淡路の海人の祭りは、民衆による素朴な共同体的行事だけではなく、地域における支配-服属関係を可視的に確認する祭儀から成り立っていた。

### ③神と一緒にした酒食の「共同飲食の宴」以降の性の解放行事の「歌垣」

□場所は砂州上のハシのもとや、近くの松林の中など。

□「天御柱」のもとでの男女二神による唱え言、その後のミトノマグアイの話につながる。

### (※) 福岡県大川市酒見の風浪宮の「<sup>ふうろうぐう</sup>沖詣り<sup>おきまい</sup>海神祭」(YouTube で確認)

□代々の神職は安曇氏

□旧暦 4 月 1 日の大潮の日に開催

2本の矛を船に乗せ、神職と氏子の数十人が、有明海の干潟に向かう

干潟上に矛とともに祭壇を開設した厳粛な神事

その後、潮が満ちるまで氏子らが「潮干狩り」を楽しむ

## おわりに -難波潟の八十島を「見る」タマフリの呪術-

▼聖武天皇の難波行幸…在位中と譲位後に計 8 回。即位直後には「和歌浦」「印南野」にも。

□最後の行幸…天平勝宝 8 歳(756)の 2 月~4 月(+孝謙女帝・光明子)

『続日本紀』前年 10 月丙子条「比日之間。太上天皇枕席不<sub>レ</sub>安。寢膳乖<sub>レ</sub>宜」

同 8 歳(756)3 月条「太上天皇、幸<sub>二</sub>堀江上<sub>一</sub>」→ 5 月 2 日に崩御。



▼栄原永遠男氏の見解[栄原 06]

□「聖武は体調が万全でないことを自覚した上で難波に行き、そこで元気を回復させようとした」  
「衰えた生命力を奮い起こすため、難波の堀江で禊や祭をしたのであろう」



▼「難波の堀江の上」への行幸日…甲寅朔日(時間は不明)

□禊ぎや祭りそのものではなく、自らの体を「タマフリ」によって回復させようとして、堀江の上から、眼前に広がる、難波潟の多数の島々(生島・足島)の情景を見に来たのではいか。

□『古事記』仁徳天皇段

「押し照るや 難波の崎よ 出で立ちて 我が国見れば あわしま 淡島 おのころ 淤能碁呂島 あじまき 檳榔の島  
見ゆ と 離<sub>二</sub>けつ島<sub>一</sub>見ゆ」

## 参考文献

- ・岡田精司「国生み神話について」(『古代王権の祭祀と神話』塙書房、1970。初出 1958)
- ・笠岡市教育委員会『大飛島の遺跡と砂洲』(同委員会、2010)
- ・加藤茂弘「淡路島の地形と地質」(「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会『「鳴門の渦潮」と淡路島の文化遺産』同委員会、2023)
- ・亀井正道「海路の祭り」(『講座日本の古代信仰』3、学生社、1980)
- ・菊地照夫「国引き神話と杖」(『出雲古代史研究』1、1991)
- ・坂江「播磨の天の橋立」(『風土記からみる古代の播磨』神戸新聞総合出版センター、2007)
- ・坂江「古代国家とミナトの神祭り」(『日本古代国家の農民規範と地域社会』思文閣出版、2016。初出は 2003)
- ・坂江「「国占め」神話の歴史的前提」(同上。初出は 2013)
- ・坂江「古代の大阪湾岸・淡路島の海人の生業と習俗 -『古事記』の槁根津日子伝承を素材にして-」(『ひょうご歴史研究室紀要』5、2020)
- ・栄原永遠男「行幸からみた後期難波宮の性格」(『難波宮から大坂へ』和泉書院、2006)
- ・高橋学「淡路島三原平野の地形構造」(『東北地理』34-3、1982)
- ・武田信一、岡本稔『淡路の神話と海人族』(Books 成錦堂、1987)
- ・土橋寛『日本語に探る古代信仰』(中公新書、1991)
- ・前川明久「国生み神話にみえる塩」(『日本史研究』101、1968)
- ・柳田國男『地名の研究』(ちくま文庫版全集 20、初出は 1936)